

国語科の学習指導における「発表会」 活性化の工夫について（その2）

—— 選択国語の実践を通して ——

永 島 典 男

I はじめに

本稿は、前回（2年前）発表した「国語科の学習指導における『発表会』活性化の工夫について」の継続研究として、発表会の際の発表方法と話し合いのしかたの改善を目指して実践し考察しようとするものである。

前稿では、国語科でしばしば行われる発表会（注. ここで述べる「発表会」とは、国語科の、主として単元の終わりに、それまでの学習の成果を共有するために行う発表会を指している。）が不活発に終わっている原因として、「学習内容が学習者の実態に合っていない（関心の薄さ、学力との不適合）」「発表者が発表会に対して不慣れである（発表力の不足）」「聞き手の問題意識が低い（自我関与の意識の不足）」を挙げ、その克服と発表会を活性化させる指導のポイントとしては、「学習者理解」「手引きの活用」「学習訓練の徹底」の3点を挙げて、『単元 古典への招待』の構想から実践までを材料に考察した。その結果、ポイントとして掲げた3点はぜひとも踏まえるべきことからであるという認識に至った。特に、単元学習で発表会を行う場合には、これらは、指導者として最低限配慮すべきことである。が、発表会活性化のための条件ということになると、これだけでは充分なものとはなりえていないのであった。そこで、本稿では発表会活性化のためのより具体的な方策について探っていきたいと考える。

さて、その方法であるが、発表会活性化のためには聞き手が会にどう参加するかということが鍵であり、ここに焦点を当ててみたい。前稿の実践でも、聞き手に対する指導として、発表後に発表者自作の小テストを実施したり、発表会の時に相互評価を取り入れて、発表者とその発表の聞き手との間の溝を埋めようと図った。これについては若干の手応えはあったものの、それだけでは聞き手はまだ“お客さん”であり、大きな課題として残っていたのであった。今回は聞き手自身が主体的に発表に加わって発表会を作っていくような発表の方法と発表会の形態について探っていくつもりである。

なお、材料には、本校で今年度から本格的に実施を始めた「選択教科の国語」の実践を使うことにする。

II 研究の目標

本研究は、国語科の単元のまとめとして学習の成果を共有するために行う学習発表会をより活性化させる方策について、下記の2点から実践・考察することによって、今後の指導方法の改善の手がかりを得ようとするものである。

- 1 発表方法（発表資料作りと使い方も含む）
- 2 発表後の話し合いの形態

Ⅲ 研究 仮 説

1 作 業 仮 説

学習発表会において、発表者は聞き手の興味を喚起するように資料作りをして、しかも調査・研究したことを初めから総て披瀝するのではなく、聞き手が興味をもつ程度にとどめ、その後、話し合い（座談会）によってさまざまな方面から考察し、最後に、発表者は話し合ったことを取り入れながら全体を発表するようにすれば、「発表会」が発表者と聞き手との間の溝を埋めて、活性化するであろう。

2 仮説設定の理由

- 1 これまで「発表会」に関する指導というと、発表方法についての指導がほとんどであった。つまり、発表者に対する指導はなされていても、聞き手に対する指導はあまりされていなかった。したがって、発表者の一方的な伝達のような発表会さえ見受けられた。これでは、聞き手は発表の内容が深くなればなるほどどうしても受け身にならざるをえない。「発表会」は発表者の自己満足のための場であってはならない。もっと聞き手が尊重されなければならない。発表会を活性化するために聞き手中心に会を考えると、発表の方法や発表の際の情報量、発表を聞いた後の扱いに工夫すべき点が見えてくると思われる。
- 2 発表者が調査・研究の総てをいきなり発表したのでは、聞き手のほうは消化不良を起こしてしまう。そこで、初めは「提案」程度とし、その研究の入り口の発表にとどめる。聞き手の興味をねらいの方向にきちんと引き出すことをねらいとするのである。そして、発表者にはその方法をさまざま工夫させる。例えば、作業をさせる、クイズ形式を取り入れる、など。
- 3 「提案」を聞いた後に、それについて思い思いの角度から（談論風に）話し合う。そうすることによって、聞き手は研究への理解が深まると同時に、研究が少しずつ自分自身のものとなってくる。また、発表者にとっては、研究の揺さぶりをかけられることになり、研究の拡大と深化につながるのである。こういう話し合いの後、発表者にまとめの発表をさせれば、その発表会では話し手は一層真剣に話さざるをえなくなるし、聞き手にとっても自然に耳を傾けたくなってくるであろう。

3 仮説の検証計画

- ◎ 仮説検証にあたっては、まず、学習者の発言の分析をする。（テープレコーダー、指導の記録をもとに）
 - ・発言の内容や質から
 - ・発言の量や話し合いの雰囲気から
 - ・つぶやきや授業後の反応から
- ◎ 集団や個の変容としてとらえなおす。
 - ・集団の変容（「学習の記録」や授業参観者の声をもとに）

国語科の学習指導における「発表会」活性化の工夫について（その2）

- ・個の変容（つぶやきや表情・動作等から）
- ◎ 上記の結果を総括し、「発表会の活性化」が図られたかどうかという点を吟味し、それを基盤として仮説そのものの検討にはっていく。

Ⅳ 学習指導案の作成と作業仮説との関連

- 1 単元名「みんなの国語研究会」
- 2 基 盤

- (1) 本校では昨年度（平成元年度）の後期に、3年生全員に、英語を除く8教科選択の授業を試験的に行い、今年度から本格的に一年間（35時間）通して行うことにした。本学習指導案は、その選択教科の「国語」（以下、選択国語と表記する）のものである。

本校においては8教科選択学習はまだスタートしたばかりで、選択国語の指導計画も充分練ったものとはいえないが、今のところ、国語科としては次のように考えている。

基本的な考え方としては、国語は基礎的な科目であるので、特に進歩を発展させることはせず、基礎的、基本的な内容や技能の補充・深化を図る場とする。

そして、取り扱う内容その他については、「教育課程実施状況に関する総合的調査研究」の報告書（昭和60. 12）や本校の特性から次のようにする。

- | | | |
|---------|--------|-------------------------------------|
| ◇取り扱う内容 | 〈表現領域〉 | ・説明的な話や文章の表現・語句の選択と使用・音声表現（話すこと） |
| | 〈理解領域〉 | ・文章の細部や表現（語句）の特徴をとらえる・音声表現の理解（聞くこと） |

※ 本校の研究から、特に話しことばに関する指導に力点を置く。

- ◇資 料 共通資料だけでなく、個に応じた資料を用意し、個別化を図るようにする。
- ◇学習形態 個別ないしはグループ学習を中心とする。ただし、個別（ないしはグループ毎）に取り組んだ活動が、必ず他の学習者や全体の中で生かされるように学習を組織する。
- ◇指導者の立場 できるだけ学習の援助者という立場をとる。

昨年度後期の選択国語では、『古典の中の笑い声』という講座を開設した。この学習で生徒たちは、予想以上に意欲的に取り組んで成果も多かった。が、指導者としては選択教科の特性の把握が不十分であったためもあると、以下のような課題をもった。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">◆ 指導者の準備にどれくらい時間がかかるかということを充分把握しておくこと。◆ 授業の間隔があくことを考慮に入れて、学習者の興味が持続する適切な題材を選択すること。◆ 学習のねらいを絞るとともに、学習者にも明確に意識させること。 |
|--|

- ◆ 学習の成果を欲張らないこと。
- ◆ 学習したことが共有の財産になるように、適宜、互いの情報を交換し合う場をもつこと。

(2) 本単元「みんなの国語研究会」は、同名の著書（大村はま、毎日新聞社）からヒントを得て考えたものである。同書は、生徒たちが自分たちの力でさまざまな国語の調査・研究を行い、さらに自分たちで話し合ってそれを広げたり深めたりするというかたちで書かれている。研究例も豊富で、研究の参考書としても使えるし、生徒たちのめざす研究レベルの手本としても、さらには話し合いのしかたの例としてもふさわしいものである。

本単元では、一人ずつがこの本を持って、読むことから出発する。次に、各自で（あるいはグループで）自分（たち）の研究テーマを決めて調査に入る。それが終わったところで、発表会をもって、全員（12人）で話し合う（座談会を開く）。そういう流れで学習を進める。

そして、この「研究テーマ決め→調査・研究→発表会（座談会）」を2回行う。その後は、ことばに関する座談会の記録をもとに、ことばと座談会について実演をしながら理解を深める学習をする。

(3) この講座「みんなの国語研究会」の学習者は12名（男子4名、女子8名）である。これらの生徒たちとは普通の学習上の付き合いはないが、幸い1年生の時に一緒に学習していて、気心も知れていて冗談など言える間柄である。そして、一人一人を見ると、やはりこの講座を希望しただけあって、国語科の学習にすすんで取り組む者や国語を得意とする者がほとんどである。1年生の時のいろいろな発表会を踏まえて、そこから発展した学習がさまざまできるという点で、指導者としてもたいへん興味のわくところである。

3 指導の目標

- ◎ 国語に関する研究テーマを設定して調査・研究をすることができる。
- ◎ 調査したり研究したことを適切にまとめて資料作りをすることができる。
- ◎ まとめた資料をもとに、効果的な発表方法を工夫することができる。
- ◎ 発表会（座談会）に進んで参加し、発言することができる。
- ◎ 発表会（座談会）では聞くことを重視し、「話の内容」「話し手の意図」「自己」を聞くように努める。（注。「聞くこと」に関する目標分析表は、「第33回 中学校教育研究発表協議会学習指導案 島根大学教育学部附属中学校」を参照されたい。）

4 指導計画（全35時間）

第一次 単元の学習計画を立てる。（1時間）

第二次 『みんなの国語研究会』を読む。（2時間）

第三次 第1回研究発表会に向けて、研究テーマを決め、調査・研究をし、まとめを書く。（8時間）

第四次 第1回研究発表会をもつ。（4時間、課外2時間）

第五次 第2回研究発表会に向けて、研究テーマを決め、調査・研究をし、まとめを書く。（7

国語科の学習指導における「発表会」活性化の工夫について（その2）

時間)

第六次 第2回研究発表会をもつ。(5時間、課外2時間)

第七次 座談会の記事を役割分担して読み、ことばについて、また座談会の進め方について考える。(7時間)

第八次 学習の跡を振り返り、成果について話し合う。(1時間)

5 作業仮説との関連におけるポイント

(1) “発表”のしかた

初めの頃の発表会では特別に指示をしないで、これまでの学習で自分たちのやってきた方法で発表(動機、伝説、調査、結果、考察)をさせる。《これをA型とする》

おそらく、発表はほとんど自分の発表までのことしか考えていないので、次の座談会にうまくつながらないことが多いであろう。そこで、2～3回経験した後、「座談会を活発にする発表の方法はないものだろうか」と問題提起をして、初めの“発表”の方法を考えさせる。具体的には、初めは“話題提案”程度ということで発表内容の一部だけを“発表”させる。そして、それをもとに参会者に何かの“作業”をさせ、それを通して話題を深化・拡充させる《これをB型とする》

また、時には、クイズ形式で“提案”をさせてみて、次の座談会の活性化にどうしたら結び付くか考えさせる。《これをC型とする》

(2) 座談会

“発表”を受けて、思い思いの角度から談論風に話し合うのであるが、ここが活発に行われるかどうかは、先に記したように、まず、この前の“発表”の内容や方法にかかっている。出席者全員が協力して、発言をつないで会を盛り上げていくことの大切さ、このことに生徒たちが気づいて“発表”を考えていくにつれて、座談会そのものについても意識が高まっていくであろう。そうはいうものの、発言にはその人の人間性や力量が関係してくるので、指導がたいへん難しいところである。時には、指導者が出て引っ張っていく場合もあるであろう。

司会者の力量も影響が大きい。どういう場面でどういう発言をすべきかということをぜひ学ばせたい。(司会は順番に全員させたい。)

(3) まとめの発表

以上の過程を踏まえて、最後に、発表者にまとめの発表をさせる。ここでの発表は、初めの“発表”と違い、本人が調査・研究したことの総てを披瀝する。ただし、座談会でさまざまな角度から話し合った直後であり、それを受けて当初の予定よりも拡充されたものが出てこなければならぬ。

(4) 座談会の振り返り

出席者としてどのように発言をつないでいくか、また、司会者としてどういう方向に話し合いをもっていったり発言をうながしたりするかということを学ばせる必要がある。そこで座談会のテープを文字化してそれをもとに検討する機会をもちたい。

V 授業の実際

2回の研究発表会の研究テーマは次のとおりである。

氏名	発表順	第1回 研究テーマ	発表順	第2回 研究テーマ
K子	1	略語の作られ方、使われ方	10	音を言葉にする時の人による違い
Y男	2	無罪が決まった人の逮捕時と判決後の新聞の扱い方の違い	1	作家による作風の違い
A子	3	News Paperの見出し	7	詩の題名のつけ方
S男	4	新聞に見られることわざ・慣用句	8	島根県の方言と私達
M男			4	「お」と「ご」のつけ方
H男	6	外来語はどう使われているか	5	本の題名と内容の関係
E子	7	広告批評	6	程度を表す語(副詞)の使われ方
O子	5	コラムの構成	2	中学生の読書事情
N子	8	歌詞の書かれ方		
R子	9	アンデルセンの童話の研究	11	文章の種類と接続詞の使われ方
I子			3	マンガの中の擬音語
W子			9	モンゴメリの比喩表現

以下、これらの中から、先にあげたA～C型の代表的な座談会を抽出して記載してみたい。

① 「A型」の例

題名「無罪が決まった人の逮捕時と判決後の新聞の扱い方の違い」

発表者…Y男 可会者…A子 ※P…話者不明かつぶやき

司会 今度は、Y男くんの発表です。タイトルは、「無罪が決まった人の逮捕時と判決後の新聞の扱い方の違い」ですね。どうぞ。

Y男 これを始めた動機は、最近、死刑宣告をされた人が無罪になるというケースが多くて、そういうのがよく新聞に載っているんだけど、新聞を見ると、「無罪になって当然」とか、「検察側はもうちょっとちゃんとしなければいけなくて、被告は全然悪くない」というように書かれているのが多いんだけど、その元被告が逮捕された時はどんなふうにかかれていたのかになって思って、そういうのに興味を引かれたので、こういうテーマにしました。

予想したことは、月並みなんだけど、逮捕時は絶対ひどいことが書かれてて、判決が出た時には「無罪になって当然」とか、そんな感じの記事になっているんじゃないかなっていうふうに予想しました。

調査は、そこに書いてあるとおりに、「石見町の少女殺人事件」を対象にして調査しました。

その調査をしたのが、左側の資料です。

逮捕時のものを見てみると、「極悪非道」だとか、「残忍な犯行」とか、とにかくもう、被告人が

国語科の学習指導における「発表会」活性化の工夫について（その2）

すごく悪いように書かれているんですけど、無罪の判決が出た後には、「無実の人が犯人として罪の償いを求められるのは許されないこと」とか、そんな感じに書いてあって、被告は逮捕の時はひどいことを書かれていたのが、無罪の判決が出た瞬間に急にいい人になっちゃってというような感じに書かれています。

感想としては、予想どおりそういうふうになっていたんで、ほっとしたっていうか、なんか…（聞き取れず）で、マスコミは変わり身が速くて、おまけに、その時の世論に合わせるということがとかく言われているんだけど、ほんとにそうだなってことがこれでわかりました。ひとつ残念だったのは、当時、まだぼくは6歳にもなっていなかったんで、この事件に全然関心をもっていなかったんで、その当時、自分がどういうふうな感想をもっていたのかなってのがわかんなくて残念でした。

反省としては、もう2、3紙、他にも入れたほうがよかったということと、そこには書いてないんだけど、他の事件についても調べればよかったなと思いました。終わりです。

P （拍手）

司会 今、聞いていて、こういうふうなもの調査というのは、きっと大変だったろうなと思いますが、大変だったこととか、話してもらえませんか。

Y男 大変だったということはあまりないんですけど、最近の事件だから。だけど、ただひとつ大変だったと言えば、図書館へ行っているいろいろコピーしたりしなきゃいけなかったことかなと思います。

司会 困っちゃったな（注。生徒からの発言がなくて）。どうしよう。先生、何かありませんか。

P （笑い） うまい。

T（教師） ぼくはまずね、Y男くんがこういうことに関心をもった、そこに関心があるんですけども…。（爆笑）山本くんらしいといえるようで。

Y男 それはどういう意味でしょうか。

T （笑い） ちょっと聞いてみたいんですけどね。「無罪になって当然」とか、「警察、検察は悪くない」というように書かれている、こういうのを何回くらい見ました？

Y男 そうですね、最近だけでも4、5件あるんじゃないんですか。

T ということは実際はもっとあるということですか。

Y男 実際はもっとあると思います。

T それから、あなたは元被告の言葉もメモしている？ で、何か気のついたことない？

Y男 「ひどい扱いだ」みたいなことが一般には書かれています。あと、そういう人を無罪にするべきだと運動をした人、支援してくれた人に「感謝する」というようなことが書かれています。それから、「親に対して」とか、「これからの身の振り方」など。

T その後の記事になります。弁護士会か何かに、「二度とこういう過ちのないように役立ててほしい」と言って、お金を寄付されたということが載っていましたね。

P ああ……（2、3人）。見たことある。

P ちょっと前だった。

P 新学期に入ってからだった。

T あなたのこの調査の一番の姿勢は、新聞の報道のあり方ということに……

Y男 ああ、そうですね。

T そういう目で見て、どうですか。

Y男 さっき、誰かが言っていたんですけど、たしかに記事は同じ人が書いたとは限らないと思うんです。けども、同じ人が書いてなくても、やっぱりデスクとかは通るわけだし、社の姿勢はかわらないわけですから、世論に流されやすいのかなって……。

(しばらく、ガヤガヤ雑談。)

T (小声で) そうですね。その場面を見れば、やはり感情的になるしね。かと言って、これでは困るけど……。新聞記者としては、「こういう事件が二度と起きてほしくない。みんなで、こういう事件がもう起きないようにしよう」という、そういう気持ちで書いているのかもしれないね。

P (雑談風)

Y男 だから、これは逮捕されたその人に対しての言葉じゃなくて、そのやり方に対しての……。

(少し、雑談)

P (小声で) おい、司会。力量を問われるでえ。

司会 関係ないけど、あのう、この間、Mサンは自分ではっきり「やった」って言ったよね。……(他のPの反応)……うん、そういうのの報道と、こういう報道のし方はどう違いますか。

Y男 わたしに聞かれてるんですか(笑い)

司会 どう違うと思いますか。

Y男 どう違うんでしょうね。

司会 また調べてください。……わたし、思ったんですけど、決まってもいないのに、性格まで、(他のP「そうそう」)「優しい仮面の下に、残忍性……」とか書いてあるけど、おおげさだと思いませんでしたか。

Y男 おおげさに書かなきゃ……。さっき、先生も言っておられたように、新聞社としては何か教育的な観点というようなものからも……ってのもあるんじゃないんですか。

P (小声で) Mの時もすごかったものね。

司会 ねー、すごかった。

P この場合、無罪判決までどのくらいかかったのですか。

Y男 えーっと(昭和)56年ですから、8年間ちょっとくらいかかって……。

P その間に、新聞の、例えば記事の大きさとか、書く内容とか変わってきませんでしたか。

Y男 それを調べればよかったんだなと思ったんだけど、ただ自分が調べるテーマが「逮捕時と判決後」だから、どうしようかなと迷ったんだけど……。

P じゃあ、逮捕時と判決後で記事の大きさに差はありま……。

Y男 やっぱり、判決後の方が大きいです。(P「はははっ」)

司会 「後」の方が大きいのか?

Y男 大きいです。逮捕時も、それはまあ大きいけど、判決後は判決の要旨とか……。

P (小声で) 逮捕時はかっこう悪い写真で、判決後はかっこういい写真じゃない。(笑い) だって、ずうっとこう思って……(他のP、反応) ねー、そんな「はればれ」、まあ、はればれするからい

国語科の学習指導における「発表会」活性化の工夫について（その2）

い顔になるんかもしれないけど……。

P （雑談）

P なんで山陰中央新報はこんなに逮捕時の記事が多いんですか。

Y男 山陰中央が一番大きかったんです、扱いが。そういうふうに、犯人が悪いっていうのを探していたらこうなっちゃったんです。

P 地方紙ということと関係があると思います？

Y男 それはやっぱり山陰中央は山陰の記事を主に扱うわけだから、おまけに県内のあちこちに支局もあるわけだから…。

司会 わたしも裕也ちゃんの記事をやっててそう思った。

P でもさ、これだけひどいこと書いてて、あとで謝ってもいいと……。

P そうよねー、（ギャギャ）それが不思議なんだけど……（ギャギャ）

Y男 この時、思ったんだけど、“感想”のところに「この事件発生当時、関心をもっていなかった」と書いてあるんだけど、もし関心をもっていたとしたら、ほくも「こいつはひどいやつだ」と思っていたと思うんですね。（P 「うんうん」）自分は、この間のMの時、「こいつはなんちゅうやつだ」と思ったから。（P 「うんうん」）そういうことも考えて……。

P 小さい時のことまで言われるものね。（ギャギャ）そういう関係ないことまで言われて。

P こういう時、家族のことまで言われて……。

P 関係ないよね。（雑談）

P マスコミってひどい。

P 週刊誌なんかだったら、もっとひどいんじゃない。（ワイワイ）

P 毎週毎週とっているわけじゃないから、その記事がおもしろかったら買うだろうし……。

P それが詳しいと思えばそれを買うだろうしね。

P そうそう。だから、ひどく書いてあればあるだけ人が買うだろうし。

② 「B型」の例

題名 「新聞に見られることわざ・慣用句」

発表者…S男、M男 司会者…K子

司会 では、これからS男さんとM男さんに、「新聞に見られることわざ・慣用句」ということで、発表をしてもらいます。お願いします。

S男 ある日の毎日新聞から新聞の中に見られる慣用句とことわざを抜き出したものなんですけど、見るとおり、「目が肥える」から「餅は餅屋」までの16個の慣用句があって、一日分の新聞としては、思ったよりも多いので、この研究で、みなさんにまず、これらの慣用句を種類別に分けてもらおうと思います。作業をしてもらおうと思います。（笑い）

M男 いちおう、ぼくも分けているんで、この慣用句を見て、どういうふうに分けられるか、少し考

えてみて、分かったような人がいたら、発表してください。

- | | | | | |
|------------|-------------|-----------|---------------|----------|
| 1. 目が肥える | 2. 足の踏み場がない | 3. 裏をかく | 4. 目に入れても痛くない | |
| 5. 足を引っ張る | 6. 手も足も出ない | 7. 手をこまぬく | 8. 歯がたたない | |
| 9. 板につく | 10. 手を打つ | 11. すずめの涙 | 12. 鶴の一声 | 13. 油を売る |
| 14. かぶとを脱ぐ | 15. 軍配が上がる | 16. 餅は餅屋 | | |

P (小声で話しながら、作業をする)(時々、笑い声)

A子 質問。意味が分かんないものがあるので、教えてもらえませんか。(笑い)

P 調べてなかったりして。

M男 いや、調べてるよ。

A子 「裏をかく」がわかりません。

P 「いやあ」(など。笑い)

M男 きちんとは言えないんですけど、調べた時に、「裏をかく」というのは、読んで字のごとくですけど、「意表をつく」とか、「相手の思っていないようなことをする」などということだったと思います。

司会 みなさん、どうですか。できた人から発表してほしいと思います。では、O子さん、できましたか。いちおうの考えでいいですから、発表してください。

O子 『人間の体に関すること』と、そうじゃないことに……。

P E子さん、どうですか。

E子 私も同じことしか思いつかなかったんですけど、『身体に関すること』でも、「目が肥える」とか「目の」とか「足の」とか「歯」とかもあるし、おもしろいなと思いました。

司会 今出た以外の意見とか、ありませんか。

H男 こうして見ると、『“ナニナニデない”で終わる』のと、『動詞で終わったり、名詞で終わったりする』のに分けられると思います。たとえば、まあ言わなくてもいいと思うんですけど、「目が肥える」が動詞で終わっているし、「足の踏み場がない」が「ない」で終わっていて、「すずめの涙」が名詞で終わっているというふうに。

P まだありますか。先生、どうですか。

T そうですねえ、まだ整理していませんが、14番や15番は、『昔の戦に関するもの』ですね。それから、13番や15番は、『商売に関することから生まれてきたもの』。「油を売る」は、昔、油売りが種油を売っていて、それが滴り落ちるときに時間で一服する、そこから生まれてきたものですね。ちょっと「裏をかく」は分かりません。それから、11番と12番は『動物』ですね。そういうふうになると、『身体に関するもの』と、『戦に関するもの』、『商売に関するもの』、そして、『動物に関するもの』。で、3番だけが残っちゃうんですが。あっ、9番もですね。これも今の中に入らない。ま、すべてを分けることはなかなか難しいのかもしれませんがね。

司会 じゃあ、そろそろ、S男くんとM男くんに答えを言ってもらいましょう。

M男 答えというか……

P ひとつの例。

M男 はい。ひとつの例を。ひとつの例として、ぼくらが考えた種類というのは、まず単純に、身体に関するもの』で、1番、2番、4番、5番、6番、7番、8番、10番で、次に、『動物に関するもの』で、11番と12番で、あと、先生は「餅は餅屋」と「油を売る」は『商売に関係したもの』だと言われましたが、ぼくらはそういう発想はちょっと思い浮かばなくて、16番が『食べ物に関するもの』だなあとということで……。それで、3番、9番、13番、14番、15番は、あっ、先生の意見から「かぶとを脱ぐ」「軍配が上がる」はたしかに『勝負に関係すること』だなあと今思ったんですけど、これを作成した時は思い浮かばなくて、『その他』として、4種類に分けました。

司会 ジャあ、その他、分類以外の、慣用句についての意見とか質問とか、ありませんか。

A子 はい。普段、会話の中で慣用句を使うというのは、ある人はあって、ない人はないと思うんだけど、新聞に使ってであると良かったですか。（P-笑い）効き目がありましたか。

S男 新聞の中に慣用句とか使われていると、意味が分からない慣用句とか使われるとよく分からないんですけど、自分で意味のわかる慣用句とか使っていると、その記事とか印象に残ったり、そういうのを自分でも使う機会とかが……。そういう点では……。

司会 他にありませんか。

T M男くん、さっき、3番を調べていたけども、3番がわからなかったから調べていたんですか。それとも、確認の意味で調べたんですか。

M男 たまにぼくも使うんで、だいたい意味はこうじゃないかなとは知っていたんですけど、それをいちおう確認の意味で……。

T そうですか。じゃあ、ここの1から16の中で、そういうのが他にあったですか。

M男 えーと……

T あ、先生が思うには12番あたりじゃないかな、もし調べたとしたら、という気がするんですけども……。

M男 12番というのは、記事の中では、「県知事さんかなにかの“鶴の一声”で電気の機械みたいなものが入った」とかいう文だったんで、……。16番がちょっとわからなかったんです。

T 他の人、どうですか。この1から16の中ではっきりしないとかね、いうのがないですか。

K子 「手をこまねく」というのがあるんですが、何ですか、これ。

S男 「手をこまねく」というのは、自分自身その問題とか起こった時に、どうしていいかわからないとか、なすべがないとか、そういう意味で自分でやれることが見付からない、そういう意味で「手をこまねく」。

司会 だれかありませんか。なかったら、次、「作業」というところに書いてあるように、「どのような時、使われているか、作ってみよう」と書いてあるんですけども、（笑い）難しいかもしれませんが、作ってみましょうか。

M男 何番でもいいですので……。

T ここに今13人いますね。易しいの、とろう。M男くん、言って。これはやめようというの。

M男 ジャあ、4番、5番、6番です。

T K子さん、指名してください。全員がひとつずつ作れるように割り当てて。

司会 じゃあ、Y男くんから、O子さんの方向に、1番から順番にします。

(しばらく、作業。「難しいな、これは」「日常会話に使うか」など、少し騒然。)

司会 そろそろ、いいですか。じゃあ、Y男くんから……。

Y男 後に回して。

司会 (……)

O子 2番でしょう。「私の家は今、“足の踏み場もない”ほど散らかっている」。

(みんな、拍手)

司会 じゃあ、次。

P 「ゲームで“裏をかかれて”負けてしまった」。

(みんな、拍手)

T いいですねえ。

P 「テスト前に勉強しないなんて、悪い結果を“手をこまぬいて”待っているようなものだ」。

T うん。いい。

(みんな、拍手)

P 「出された問題を考えたんですけど、難しくて、“歯がたちません”でした」。

(笑い、拍手)

P 「国会議員の人はいつもしゃべっているせいか、演説のしかたも“板について”いる」。

(拍手)

P 「両者の利害が一致したので、その条件で“手を打った”」。

(拍手)

P 「今日は姉の卒業式です。なのに、彼女は“すすめの涙”ほども涙を出さなかった」。

(笑い)

T 涙にちょっとこだわっちゃったかな。

P 「先生の“鶴の一声”で教室がシーンと静かになってしまった」。

P どこかであったような気がする。(笑)

T “鶴の一声”という場合は、わいわいがやがや、なかなか決まらないんですね。それが、たった“一声”で決まるんだから、みんなを納得させる、よっぽど重みのある声なんでしょうね。

司会 では、次、お願いします。M男くん。

M男 これ、ちょっと難しいんで会話形式で……。Aくんが「また、山本が遅れてるなあ」(笑い)

Bくんが「ああ、あいつなら、またあそこで“油を売って”いるよ」。

P (拍手)

P 野球の場面ですけども、「九回の表、大量得点をとられて、相手チームはとうとう“かぶとを脱いで”しまった」。

P (拍手)

T 題名は「まつたけ採り」。会話形式で。(笑い) お母さん「そろそろ帰りましょうか」 一郎「お姉ちゃんはいくつ採った？」 幸子「3つ」 一郎「ぼくは4つ」 お母さん「今日のところは—

郎に「軍配が上がった」わね。」

P （笑い。拍手）

P 「鉄鋼所がパン屋を始めて、失敗し、やはり“餅は餅屋”だと思った。」

（爆笑）

司会 問題の「目が肥える」。

T みんなで考えてみましょう。「目が肥える」というのは、どういうふうにするかな。だれかできた人が言ってあげればいいんじゃないですか。

（少し、間）

T じゃあ。ある洋服店でね、お客さんと店員さんとが会話をしています。「お客さま、これはいかがですか」「これはねえ、ちょっと襟のところが流行遅れね」「これはいかがですか」「それは袖のところがちょっと時代遅れじゃないかしら」「さすがお客さまは“目が肥えて、いらっしゃいますので……」。

（拍手）

A子 「目が高い」とどう違うんですか。

T 「目が高い」ねえ。（少し、間）なんか、聞いたことある？

P （小声で言い合う）

T 「目が肥える」っていうのは、その人が奥になにか豊かな鑑識眼のようなものを持っている、「目が高い」はどうなんだろうねえ、鋭くて、適確な判断ができる、そんなふうにするんじゃないかなあ、そういう用例から見ると。

司会 じゃあ、ひととおり終わったので、最後に司会者として、感想を言わせてもらいます。あっ、まとめがあった？ すみません。じゃあ、まとめを言ってください。

M男 今回の研究で、新聞の中の、普段あまり目を通さない紙面も読んだうえで、一番驚かされたのは、どのような紙面にも慣用句が多かれすくなかれあったということでした。また、多く使用されているのは社説や、読者からの投稿など、事実に対する筆者の考えを文章に表すときでした。やはり、文章表現を豊かにするためには慣用句は欠かせないと思いました。

また、今回は慣用句について調べたのですが、ことわざ、故事成語、格言なども多く使われていました。日本人として、これらの慣用句、ことわざ、故事成語、格言などをきちんと使う、使えることは、美しい日本語、正しい日本語を守り、将来に伝承することにもなるのではないかと思います。

また、これらのものが自然に使えるようになれば、手短なスピーチなどでもきつと適切な表現ができ、相手にも納得してもらえることでしょう。以上です。

司会 はい。ありがとうございました。時間がないようですね。じゃあ、これで終わらせてもらいます。

P （拍手）

③ 「C型」の例

題名「マンガの中の擬音語」

発表者… I子 司会者… H男

司会 「マンガの中の擬音語」ということで、これからI子さんに発表してもらいます。クイズ形式を取り入れての発表ということですので、よく考えながら聞いてください。では、I子さん、よろしくをお願いします。

I子 クイズの前に、プリントの右側の方を見てもらうと同じ画が2枚あると思うんですけど、まずそれを見てください。(資料③の1)上の方には擬音語が入っていて、下の方は抜けています。まず、この2つを比べてみて、何か感じたことがあったら言ってもらいたいですけれども……。例えば、この2枚の画を見比べてみて、どっちがいいとか、あった方がどうだとか……。そういったことでいいです。

Y男 「ばちーん」というのがあった方が、何となく、そのときのその状況がわかるような気がします。

K子 状況がわかるって言われたけど、書いてあるその言葉によって、その当たったときの感じというのもわかると思います。強さとか、そんな感じもわかるんじゃないかなと思います。

T 強さというのは、その「ばちーん」という言葉そのもので？ それとも、「ばちーん」でなくて他の言葉でも？

Y子 「ばちーん」でなくて他の言葉でも考えられると思います。それから、この字が大きく書いてあることも、そのことが大きかったんだな、ということが感じられるんじゃないかなって思います。

T ここでは平仮名で書かれていますね。なにか、片仮名と平仮名ということでもあるんじゃない？

I子 これは時代ということもあると思うんですけど、もし、これ、片仮名で書かれていたら、カチカチッという感じになって、痛いって感じがするんじゃないかなって思うんですよ。それが、平仮名で「ばちーん」とあると、『あっ、おもしろい』っていうか、『笑える』っていうか、そんな感じになるんじゃないかなって思います。

司会 今、擬音語の効果というのが出ていたように思うんですが、ちょっと左側の方を見てみてください。ここに、①から⑤まで空欄になっているんですけど、これを見ていると何か変だなあって思いませんか。

T ぼくなんかの感じでは、なくても別に変わらないんだけどね、①から⑤はね。(P 「まるで無声映画だ。」)ふうん、みんなやっぱり、あった方がいい？ ないと変？

M男 こういう擬音語がないと、こういうマンガではテンポが悪くなるというか、遮られて、どういうマンガなのかなとわからなくなる気がして、やっぱりあった方がいいなと思います。

I子 じゃあ、ここらでクイズに入りたいと思います。この①から⑤までにあてはまると思う擬音語を入れてもらいたいんですが、まず、①と②についてしましょうか。それで、場面がわからないと入れにくいと思うので、ちょっと説明しますと、①は着地したところですよ。それから、②はロープに乗っている、ロープの状態を表しています。

T これは別に正解を求めようっていう問題ではないんでしょう。

I子 はい。

P （しばらく考える間。小声で話し合う者も。）

司会 では、いいですか。A子さん。

A子 ①では、最初、まだ説明がないときは、この上を歩いているのかなと思ったんですよ。それで、「トットッ」としたんですけど、これは着地したところと聞いてちょっときつい音になるのかなと思って、「ッダ」にしました。発音はないかもしれないけど、「ダ」の後に「ッ」がくるんじゃないかと、前にくるっていうふうに……。

P それは片仮名ですか、平仮名ですか。

A子 片仮名です。

—中略—

司会 次に行っていていいですか。（P「はい。」）じゃあ、④へ行きます。

I子 これは、肩をつかんだところ。

P 「ガシッ」

P （がやがやといっせいにしゃべっている。テープ聴取不能）

Y男 ここはなんとなく、コメディみたいに笑えるところみたいなの……。

I子 平仮名と片仮名では？

K子 イメージが平仮名って柔らかい感じで、あまり強さを感じないから、片仮名の方が、その人の強さがすごくてことがわかるんじゃないかなって思うんだけど……。

A子 片仮名に小さい「ッ」を入れたらいいと思う。

W子 わたしも同感。そう思います。

P 「ガシ」に「ッ」をね。

—中略—

司会 じゃあ、⑤にいけます。

I子 これは抱き着いているところです。

P キャッ、ワハハッ（など笑い）

K子 これは「ミキミキ」って骨が折れている音がしてる。

P （爆笑）……（テープ聴取不能）

K子 だけど、抱き着かわれているこの相手の男の人のほうが、すごくつらそうだから。

P （爆笑）

A子 びっくりしてんじゃないの。

P だけど、両方……（テープ聴取不能）

P 「ボキッ」とか……。

Y男 「ガシッ」は……。

K子 だけど、④も「ガシッ」みたいだったから……。

I子 じゃあ、平仮名と片仮名では。

H男 片仮名だとぼくは思う。

—中略—

I子 じゃあ、これから実際の元のものを配ります。(と言って、資料③の2を配布。)

P えーっ。

P ふうん。(などしばらくガヤガヤとしている。)

I子 ①はだいたいみんな近くて、……(不明)……片仮名で書かれていました。

(②③は省略)

I子 次、④で、Y君が「コメディタッチで平仮名で書いてある」って言ったんですよね。それから、K子さんが「平仮名だと柔らかい感じになって合わない」って言ったんですけど、片仮名ではなくて平仮名で、それで「ぐわしっ」と書いて力強さを出そうとしてこういうふうになったんじゃないかと思うんですけど……。

P なるほどね。

I子 それから、⑤ですけど、これも「ガシッ」ではなくて「がし」と「っ」の間に「い」を入れて、それでやはり力強さのようなものが……。 (P 納得した顔つき)

司会 皆さん、いいですか。(I子に向かって)じゃあ、研究のまとめをしてください。

I子 (資料③の3を配布して)わたしがこれを調べようと思ったのは、その擬音語の効果がどういふふうになっているのかと思ったことからでした。方法としては、マンガの中に出ている擬音語を全部調べてみて、それを分類したんですけど。初めは簡単に思っていたんですが、調べてみて擬音語はものすごく重要な役目を果たしているということがわかりました。それはこの昔のマンガと比べてみるとよくわかるんですが、(資料③の4)昔のものは本当に物足りなく思うくらいでした。

それから、この擬音語の使い方によって、マンガというのもすごく変わってくると思いました。わたしが今回使った、この『らんま1/2』というのはコメディなんですが、これもちゃんとこういったものによって成立されているんだということがわかりました。

最後に、研究をやるまでは擬音語なんてあんまりなくてもいいと思っていたぐらいなんですけども、この研究をしているうちに、本当にだんだん大切だということがわかりました。私達も、生活の中につこうこういうのがあると思うんですけど、私達の言葉ではいいあわせないものを表現しているということを知っておきたいなと思いました。

P ちょっと、昔のものとの比較ということをもう少し……。

I子 その資料を見てもらうとわかると思うんですけど、昔のマンガには「くるっ」とか「キーン」とか「カーン」とか、現実にある音だけなんですよね。これが今のマンガだったら、もっと……(テープ聴取不能)……「ぐいーン」とか、「ぐわちっ」とか、……。

T これはどれくらい前のものでしょうね。1960年代、今から30年までではないかもしれませんが、20年は前ですね。そのころは、実際にある音だけですか。

P でも、ここに「ハッ」というのがあるんですけど……。

T どこに? あっ、これね。

P でも、これは……。 (テープ聴取不能)

T これは「はっとする」という「ハッ」ですね。擬態語に入るかな。I子さんの分類の「実際には

ない音」にはやはり入らないでしょう。

A子 今思ったんですけど、この30年ほどでなんでこういうふうになってきたのかということなんです。マンガを読む人が増えてきたということもあるかもしれないけど、いろんな音が増えてきたということもあるんじゃないですか。

I子 これはわたしもよくはわからないんですけども、今のこういうマンガというのは実際にある音だけではあわせないとか、不十分なんじゃないかという気がします。いろんな人がいろんなことがわかるようになってきたとか……（T テレビの普及で）そう、そうやってみんながわかってきて……。それともうひとつ、マンガの質による違いということもあると思います。

T そうだね、マンガの種類、質も違うから。こちらはきまじめで正面から描いているし、それに対してこちらはさきほど誰かも言っていたけど、笑わせるというねらいも半分あるんだね、まじめな裏に冗談やふざけとか、ユーモアをもたせるというところがあって……。

P 『ちびまるこ』でも、「サーッ」といって寒気がして……。

P （笑い）

P そうねえ、完全に笑わせるためだもんね。

T それから、ぼくからひとつ。表記についてだけど。さきほど出た「ぐわし」「がしいっ」、こういうのが昔なかったというのは、これは、日本語の発音にこういうのがなかったからなんですね。こういうところにも、はっきり時代の変化を感じます。

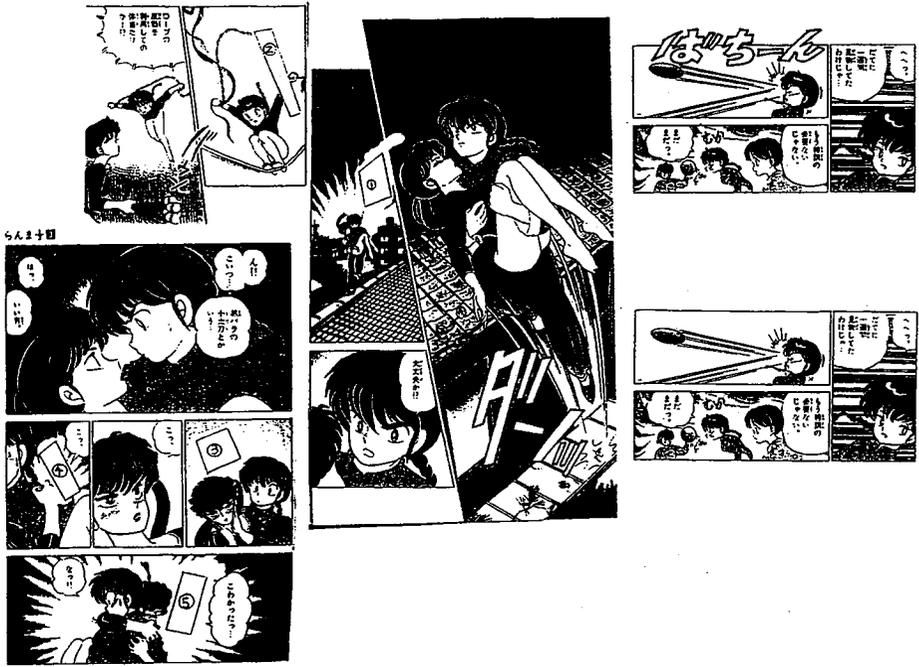
司会 では、みなさん、だいたい、これでいいですか。（P 「はい。」）

ぼくもマンガはよく読む方でして、普段は何気なく読んでいるんですが、こうして発表を聞いてみると、たしかに擬音語があるのとないのでははっきり違ってくるということがとてもよくわかりました。

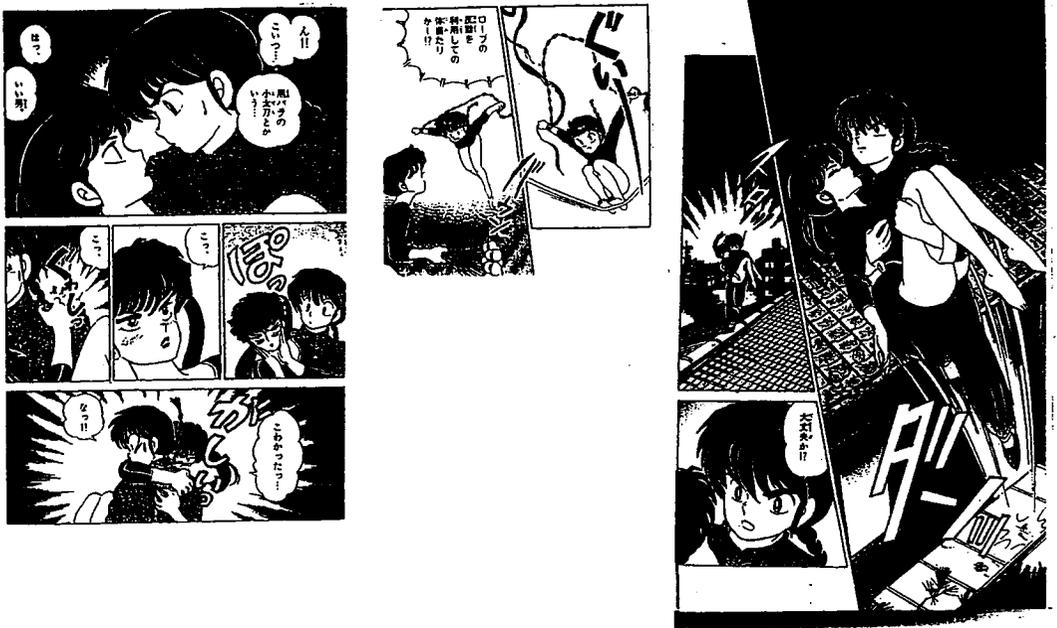
えーと、これで終わりたいと思います。

マンガの中の擬音語 I子

資料③の1



資料③の2



資料④

生徒の反応——B型・C型で行ってから——（ある日の「学習の記録」より。この形式の用紙に毎回書きためていくもの。）

	会の雰囲気はどうだったか	座談会を盛り上げるためにこうすればいいと気付いた点		
		発表のしかた	参加者の発言・態度	司会のしかた
K子	明るく、楽しい感じだった。	みんなが参加していてよかった。しかし、時に座談会から雑談会に近くなった。	自分の意見をみんなしっかり言っていた。	もう少し話してもよかったと思う。
Y男	なかなか明るく、なかなか雰囲気よかった。	もう少しまとめてから発表すべきだと思う。	話がもう少し発展するといい。	司会がまとめる部分が少なかったのもっと司会らしくすべきではないか。
A子	質問形式だと意見が出やすい。	話し言葉で言うといい。その点で良かったと思う。	きちんと自分の意見が言えるようにしたいものだ。	発表者と、どんな仕事をするか、ある程度話し合う必要があるかも……。
S男	問題形式で和やかな雰囲気だった。	おもしろい発表だった。プリントを途中まで見せないというのもおもしろい。	それぞれが勝手にしゃべると全体としての話し合いがわからないのでやめたほうがいい。	発表者にすべてやってもらっていたような感じだった。もうちょっと出番があってもいいのでは。
M男	終始和やかな楽しい感じだったので、参加しやすかった。	雑談が多くなったので、発表者は自分の研究を堂々と話す必要がある。	終始、話題を絶やさないと。ただし、あまりかけ離れた話題を持ち込まないこと。	話がある程度脱線しそうになったら、うまく切り換えるべきだ。
H男	クイズみたいだったので楽しかった。	興味もてる発表をしていた。もう少し簡潔に言ったほうがよかった。	挙手がなくて気楽に言える。また、話題がいろいろそれで進行が遅れることがあった。が、これが悪いことなのかはよくわからない。	発表者に仕事をとられていた気がする。
E子	聞いている人も、楽しく会に参加できた。	調べたことの発表だけに、ならず、みんなでどうしてそうだったかと考えられるような発表。	気づいたことは、はっきり言うのがいいと思った。	総合的なまとめをする。
O子	すごく盛り上がって楽しかった。	今回のように問題を作るとかして、みんなに発言の機会をたくさん与えるようにするといい。	自分の意見はすぐ言うようにする。	常に会を引っ張るようにすべきだけど、しなくていいときは自分の意見を言ってもいいと思う。
N子	クイズ形式っぽくしたので、なかなかにぎやかに盛り上がった。	だいたい良かったし、みんなを引き込む形だったと思う。	みんな、わりと楽しんでいたのでよかった。意見と呼べるようなものももう少し出るといい。	発表者を助けるという司会者の立場を考えてやっていくといいと思う。
R子	雑談が少しあったけど楽しかった。	質問形式で良かったと思う。	雑談は少しはよいと思うけど、あまり多いと迷惑。	感想やまとめを最後に言う。時間を常に気にするべきだ。
I子	楽しかった。形式ばらないで（手を挙げたりしないで）、気づいたことをすぐ口に出す。	自由にどんどん発言する。	話がつまづいたり、とぎれたりしない以上、司会は進行だけでよい、と思う。	
W子	話しやすく、思わず言葉が出てしまった。	問題形式の資料がおもしろかった。	発言したくなったらどんどん言うようにする。	いろんな人にあてる（または発言を誘う）必要がある。時間を考慮に入れる。

国語科の学習指導における「発表会」活性化の工夫について（その2）

資料⑤

授業参観者の声（注、本校の研究会の折、「マンガの中の擬音語」「『お』と『ご』のつけ方」の公開授業後に感想として書いていただいたもの。）

- ◇ 提案者の発表が、意見交換の中で広がり深まっていくのがとても自然で、肩の張らない、楽しく、しかも子どもたちが知的興奮を覚え、満足していることがうかがえる授業でした。国語の楽しさ（言葉と生活）を再考させていただきました。
- ◇ 中学生にして、サロンのような雰囲気、研究することの喜び、自分の意見が認められているという研究発表、座談会。大変、私自身も楽しく見させていただきました。
中でも、生徒一人一人が楽しみながら、自分のひらめき、知識を出し合い、深めていく場面が多くありました。プリントのまちがいなども、教師が出るまでもなく、生徒の方から出ているもの学習でした。
- ◇ とにかく、まず生徒に驚きました。主体的な学習、という感じがしました。
レジメを用意し、討議するという形が実感されているようで驚きました。（意見等、一言も発言しない生徒もいましたが、自分の発表当番になれば、おのずと話すのでしょう。）

資料⑥

研究発表会を終えて

氏名	研究発表会を終えて自分の身についたと思うこと	今後、こういう会があったとしたら	
		進んで参加	発言する自信が以前より
K子	自分の思ったこと、孝えたことを自分一人の心にひそめるのではなく、他の人に提案してみたり、伝えたりできる回数が増えた気がする。	できそう	変わらない
Y男	みんなに語りかけるような発表のしかた、発言のしかたが、少しはできるようになった。	できそう	増した
A子	私の“発言のしかた”、これにはずいぶん反省させられました。私はいつも、はっきり自分の意見の内容が言葉に言えないんです。座談会は意見を言い合って、もしまちがえても、それでいいと思うんです。座談会を終えて、深くそう思いました。	できそう	どちらかという減りました。というのは、私はもう少し考えて言わないといけないと思うから。
S男	発表のしかたは以前よりもリラックスしてできるようになった。発言は、その時のムードによる。司会については、どういうところで何を言えいいのか、しっかりつかめなかったのが残念であった。	できそう	増した
M男	発表のしかたでは特に変わった点はないが、第1回の発表会の反省から司会のしかたについて自分なりに気をつけたつもりです。	できそう	増した
H男	どういふふうにして司会者の仕事をそれらしくするかというところを頭を使ってできたと思う。	できそう	変わらない
E子	司会の仕事が回を重ねるごとにスムーズにいくようになった。発言はもっとたくさんの方がすればよかったと思う。自分自身でもあまり発言できなかったのが残念だ。	できそう	変わらない
O子	私はだいたいあまり発言しない方だけど、少人数だったこともあって発言しやすかった。	どちらとも言えない（時と場合によって）	増した

氏名	研究発表会を終えて自分の身についたと思うこと	今後、こういう会があったとしたら	
		進んで参加	発言する自信が以前より
N子	いろいろな人の発表をよく聞けて、個人でいろいろなことを思ってるなとわかった。また、こういう会では積極的に発言して初めて参加したといえるのだと思った。	自分の好きな話題なら、参加するかもしれない。	自分でも、自信をつけたいと改めて感じた。
R子	以前はこういう会ではすごく緊張してなかなか発言できなかったが、このごろは楽にのぞめるようになり、発言もふえた。また、発表のしかたも少し工夫できるようになった。	できそう	増した
I子	人の発表や参会者の発言や何気ないつぶやきなどにも、注意深く耳を傾けることができるようになった。	できそう	増した
W子	いつ発言がほしいかということ、タイミングが大事だということがわかった。	できそう	自信ということになると、むしろ減ったという感じ。

VI 考 察

1. 座談会の変容

学習中の発言（資料①～③）や「学習の記録」（資料④）、指導の記録等を分析して、先に挙げたA型の発表会（座談会）とB型・C型のそれとの比較を試みた。

まず、A型について。ここでの発表は、「動機→予想→調査結果→感想（反省）」という一般的な形で行われている。（これは、先に記したように、発表会の前に特別の指示を与えないで、これまでの指導でさせたものである。）すると、後の座談会では次の点が顕著である。

- ◆ 参会者は、発表者に「問う」か、ないしは「うかがう」という姿勢が見られる。
- ◆ 参会者からの自主的な意見や、触発されての感想が少ない。（発言が少ない。）
- ◆ 発表後のしばらくは発言が出にくく、雑談になってやっと感想や意見が出て、活発になっている。
- ◆ 話し合いが焦点化されにくく、深まりも少ない。
- ◆ 発表者の認識が揺さぶられることが少なく、発表のしっぱなしになりやすい。
- ◆ 会の雰囲気がやや固い。
- ◆ 司会者の力量が問われる。

それに対して、作業を取り入れたB型や、クイズ形式のC型では、次の点に変化が見られた。

◇ 参会者からの自主的な意見や質問、触発されての感想が増えて、参会者の発表に対する意識が高まり、認識も深まっている。《□を付けた発言や、B型の短文づくり、C型の回答等にそれが表れている。》

◇ 発表者自身の再認識や修正が行われている。

◇ 笑いや拍手が自然に生まれている。

◇ 会の流れがスムーズである。

◇ 雑談が減って、集中度が増した。（雑談が、本筋からまったくそれたものでなくなった。）

◇ 発表者の“まとめ”がよく浸透するようになった。

◇授業後の顔つきに満ち足りたものがうかがえるようになった。

◇司会者の力量に左右されることが少なくなった。（司会がしやすくなった。）

2. 集団や個の変容

1 集団の変容

生徒たちの意識が「いきいきとした座談会のもち方に」向くように、発表会の最中はもとより、あらゆる機会をとらえて指導しようと努めた。（しかし、それが強制にならないように気をつけた。）例えば、次のように。

◇座談会終了後に、さりげなく座談会そのものの感想を言い合った。

◇座談会を文字化したものを読み合って、話題を深めたり広げたりする発言について考えた。

◇「学習の記録」一覧をもとに評価や意見を交換し合った。

◇個々の生徒と発言のしかたや司会の進め方について話し合った。

座談会に対する慣れもあるので、これらのうちのどの方法がどれだけ効果があったかは測りかねるが、生徒たちの座談会に対する意識はしだいに高まり、目に見えないひとつの結束のようなものが芽生えてきた。そして、座談会の回を重ねる度に生徒の表情は明るく豊かになってきた。

その一部は、資料⑤にも表れている。この日は、初めのころはいつもより雰囲気が出なかったが、生徒たちは互いに雰囲気を盛り上げようとして、徐々に自分たちでペースを作り上げていった。

2 個の変容

資料⑥によると、一人一人がこの発表会を通して自分なりに何かの課題を持ってそれを追及したり、自身の変容に目を向けていることがわかる。これらは初めから意識していたというよりも、学習を進めるにつれてしだいに認識を深めてきたものと考えられる。

個の変容で、特に顕著であったのは、A子であった。彼女は、このまとめに、「私は自分の“発言のしかた”、これにはずいぶん反省させられました」と書き、その理由に、「私はいつも、はっきり自分の意見の内容が言葉に言えないんです」と記している。たしかに、A子は、発言をしていてしばらくすると、よく「あれ、わかんなくなっちゃった」とか、「何が言いたいかわかんなくなったので、これで終わります」と言って、途中でやめていた。ところが、たいへいはそれが誘い水のようになって他の生徒たちから次々と意見が出るようになる。すると、A子がふいに、「そうそう、それが言いたかったんです」と言う。そういうことがしばしばあった。指導者としては、このA子に何を言ってやるべきか、迷ったことも何回かあった。しかし、それは、本人がいつか気がついて自身で解決策を模索するのが一番いい方向であろうと考えて、何も言わないでいた。先の文に続けて、彼女は、「座談会は意見を言い合って、もしまちがえても、それでいいと思います。座談会を終えて、深くそう思いました」と書いている。これは、A子なりに自分をよく見つけたうえで言葉だと受け取れる。A子にとって、この座談会の学習は、辛い場面もあったろうが、忘れられないものとなったに違いない。

このA子の変容を他の生徒たちがとてもよく理解していたことにも驚かされた。

3. ま と め

以上、「発表会」活性化のために聞き手を会にどう参加させるかということに焦点を当てて、実践の跡を見てきた。これらを通して、仮説のかかなりの部分に手応えを感じている。つまり、学習発表会の一つの型として、発表者は聞き手の興味を喚起するように資料作りをして、しかも調査・研究したことを初めから総て波瀾するよりも聞き手が興味をもつ程度にとどめ、その後、話し合い（座談会）によってさまざまな方面から考察し、最後に、発表者は話し合ったことを取り入れながら研究の全体を発表するようにすれば、「発表会」が発表者と聞き手との間の溝を埋めてより活性化する。この結論はまた、「基本的には、話し合いは聞き合いであり、話しことばの指導は聞くことの指導から出発すべきである」という、本校国語科がこの数年取り組んでいる「聞く力の育成」の研究結果（途中）とも合致する。

今回実践したB型・C型の発表には、まだまだ改善の余地がいくつかある。特に、C型では、生徒も「クイズ形式というのは和やかにはなるが、あまり座談会らしくなくなるという点も考えなければならない」（M男）と指摘している。クイズにすると、話し合いも限定されがちになるというマイナス面をどう克服としていくのか。クイズの作り方、話し合いの進め方等には内容に合ったきめ細かな指導が必要である。

最後に前回（2年前）と今回の研究を通して話し合いの指導について強く感じたことを付記しておく。

「発表会」や座談会—話し合い—が成立するためには、まず基盤として、参加者たちが心を一つにして話し合いを豊かにしていこうとする前向きな人間関係や、あるいは各人が自身の話し・聞く力をつけていこうという学習意識をもつことが必要である。このような話し合いの基盤づくりが話し合いの出発点であると言える。しかし、よく考えてみると、実はこの“基盤づくり”の問題は、話し合い指導の究極のねらいでもある。私たちは話し合いの指導を通して一人ひとりの表現力や聴取力、そしてそれらに裏付けられた豊かな人間関係づくりの能力、こういった力をつけようとしているはずである。したがって、話し合い（話しことば）指導には終わりが無い。どこまでも続く“過程”である。私たちは、私たちの前にいる学習者たちとともに摸索しながら進むしか道はないのである。

今日、話しことば（音声言語の指導）の必要性が広く認識されてきたことは誠に喜ばしいことであるが、大切なのはこれを学習指導要領改訂時の一時の騒動に終わらせないことである。そのためには、話しことば指導の必要性が叫ばれるようになった今日の背景を的確にとらえるとともに、指導の目標を正確に見据えることであろう。また、話しことば指導の精神は、より学習者に近付き、一人ひとりが効力感のもてるような学習の創造にあると考えるが、これを機会にそれがすべての国語科学習に敷衍するよう、学習改善に取り組みたいものである。